

デモンストレーション課題を用いた自閉スペクトラム症者のインタラクションの コンテキスト及び社会的立場の指標について

合崎京子（麗澤大学/浜松医科大学） 巽 智子（University of Liverpool） 中村 元昭（昭和大学）
沖村 幸（昭和大学） 山末 英典（浜松医科大） 岩渕 俊樹（浜松医科大学）

1. はじめに

本研究は、Autism Diagnostic Observation Schedule, Second Edition (ADOS-2) のデモンストレーション課題における検査者と自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, ASD) 者との相互行為の分析をととして ASD 者の語用論的ストラテジーを明らかにするものである。

精神障害の診断と統計マニュアルの最新版 (DSM-5-TR; American Psychiatric Association, 2022) では、ASD の 2 つの中核的特徴として「社会的コミュニケーションや社会的相互作用における持続的な障害」と、「反復的な行動パターンや限局的な興味、活動」を挙げている。しかし先行研究の多くは、医学や心理学の研究者や臨床家の視点から ASD 者の語用的特徴を自己に内在する特性と関連付けると同時にそこで見られた特徴についてやや否定的に捉える傾向があり、相互行為の性質や対話者との関係性に着目して ASD 者の語用能力を多角的に捉える研究は不足している。一方で近年は、会話分析など、対話者とのインタラクションに着目した研究によって、以前は ASD の個別の症状として扱われていた行動は社会的相互作用から生じており、反復的な発話が会話の中で様々な機能を果たしていることが示唆されている (Sterponi & Shankey, 2014 など)。つまり、社会的コミュニケーションの特異性と反復的な行為とは不可分なものであると考えられる。そういった状況も踏まえ、ASD 者の語用について会話事例を分析した合崎 (2023) は、ASD 者が会話中に反復を効果的に用いることで詩的機能 (Jakobson, 1960)、すなわち発話のメッセージそれ自体に焦点を当てる (注意を向けさせる) 機能が顕著な (メタ) 語用ストラテジーを構築し、対話者との会話における共通基盤を構築していくことを示唆した。しかし、この研究は一事例の分析のみに留まっていたため、ASD 者に共通する語用的傾向と各個人の (メタ) 語用ストラテジーの関係については、さらなる調査が必要である。

2. 本研究の目的とデータ

本研究では ADOS-2 のデモンストレーション課題から抽出した ASD 者が参与する 24 事例 (施設 A : 13 事例, 施設 B : 11 事例) 会話を用いて分析する。ADOS-2 とは、ASD 特性の度合いを評価するために標準化された半構造化観察評価ツールで、通常、臨床トレーニングを受けた専門家が実施及び評価を行う。ADOS-2 の中には、自分の経験の報告や器具を使った課題、ストーリーテリングなど様々な課題が含まれているが、その中でも本研究では、他の課題と比較して調査協力者間でさほど言及指示的な流れの差異が大きいと思われる [歯磨きのデモンストレーション課題] 場面をデータとした。この課題は検査者がまず冒頭に「(私が歯の磨き方を知らない人だとして) 私に歯の磨き方をやって見せてください。ここに洗面台があって、ここに歯磨き、歯ブラシ、コップがあります。ここに蛇口があります」という指示を行い、それに続けて調査協力者がデモンストレーションしていくという流れになっている。検査は施設 A の事例で S 氏 (臨床心理士, 女性)、B の事例で K 氏 (医師, 男性) が行った。また調査協力者は施設 A の 1 事例を除き、全員成人男性であり、文法や語彙の面で特に遅れはない。本研究では、この課題が持つ説明や指示のコンテキストという性質に注目し、さまざまな社会的コンテキストを指標 (Silverstein, 1976; Cook, 1990) する日本語の発話末形式及び、その他の箇所における反復表現との関連について検討する。具体的には各事例の ASD 者の発話データ内で同一の発話末形式がどの程度用いられるか調査し、その頻度と発話末表現以外の各事例内で見られる反復的な言語表現との関連性を探ることで、ASD 者の語用の特徴である常同性 (一貫性) が局所的に、また事例全体をととして、語りの構造にどのように貢献しているか考察する。また、発話末形式の使用の変化や、その他の箇所に見られる表現との関係性を反復、対照ペア、隣接ペアといった言語人類学や会話分析の分野で用いられている語用論的概念の観点からみることで、反復的な言語がどのような機能を果たし、彼らの (メタ) 語用ストラテジーとしてどのように機能しているか、その一端を明らかにしたい。

3. 分析方法

自然発話においては、文法的な情報に加え、韻律的情報（や非言語行為）によって対話者が当該発話の（語用論的な）区切りと識別することが多いため、談話・会話を区切って書き起こしていくための方法論の1つである Intonation Unit (IU), すなわち、息継ぎ（ポーズ）、音の高低（ピッチ）の変化による単位を基盤に、文法的要素も加味して一つの分析単位とした。その単位末を発話末とし、本研究では検査者が課題を提示した後からの発話データで出現した発話末について、全体の中で頻度の高かったものを挙げ、それらについて各事例内で用いられた回数を抽出し、量的分析を行った。その結果をもとに、具体的に他の語用論的な現象、(1)各事例の冒頭で課題実施の依頼を検査者が行った直後の応答、(2)発話末に反復が多用されていた群における発話末以外の表現の反復、(3)フィラー及び沈黙等、それぞれの間の関連を調査する。

4. 分析と結果

4.1 発話末形式の分布と反復（全体の傾向）

本研究で調査した発話末形式が用いられたのは、総発話数 1203 のうち 487 であった。全員の発話末の形式で最も多く用いられたのが「～て/～で」(193 回)、以下「～です/～ます」(131 回)、「～ください」(30 回)、「～ね」(25 回)、「～か」(25 回)、「～けど/～けれども」(22 回)、「～たら」(21 回)、「～なので」(20 回)、「と（例：コップがありますと）」(13 回)、「～よ」(4 回)となっている。各調査協力者の発話末表現のタイプ数は平均 5.25、標準偏差 1.78 であり、個人間で大きくばらつく結果となった。「て・で」で終わる発話を多く産出する話者もいれば、「なので」、「です・ます」、「ね」など複数のパターンを用いる話者もみられた。これらの発話末形式を伴わない場合は、主にフィラーやあいづちのみの発話（例：「ええ」）、フィラーで終わる発話（例：「でブラシのついてる部分をあの」）、名詞や格助詞で終わる発話（例：「蛇口でぬるま湯」）などが主である。

発話末形式の反復について、その中で前後 3 つまでの発話に一致する発話末形式がみられる確率は 0.142 で、調査協力者間の確率の標準偏差は 0.09 であった。40%近い確率で反復形式の一致がみられる人と、ほとんど一致しない人まで広範囲に分布していた。

4.2 他の言語的要素との関係性

(1) 各事例冒頭の応答（隣接ペアの観点から）

この課題の冒頭箇所は端的に言う、隣接ペア (adjacency pair), すなわち、調査者による「課題呈示と課題実施の依頼（隣接ペアにおける第一ペア成分）」と、それに対する調査協力者の「受諾/拒絶（第二ペア成分）」という連鎖がいずれの事例にも必然的に生起する。調査協力者からは（その場に）適切な第二ペア成分が産出されるはずだという推測がなされ、調査協力者には適切なペアの二番目の部分、あるいはそれがないことの説明を提供することが期待される (Heritage, 1984) ことから、調査協力者の第二ペア成分で発せられる応答は、調査協力者の、場面や相手の立場の一端を指標するものになると考えられる。「依頼-受諾/拒絶」タイプの隣接ペアには「優先的/非優先的」という特有の序列構造が存在するが (Goodwin & Heritage, 1990)、依頼に対する応答では受諾が優先的である。トランスクリプトの当該箇所に注目したところ、調査協力者の応答は大別して①即座に受諾し実施を開始（例：「ここにですね洗面台があつて」）(6 例)、②実行が困難であることを呈示（例：一秒以上の沈黙や「難しい」などの発話等）(6 例)、③相手の質問（の意図）について確認要求（例：「それは私がいつもどうやって歯を磨くかってことですか？」）(4 例)、④その他曖昧な応答等 (8 例)、以上に分類され、拒絶を示した事例はなかった。つまり、いずれの事例においても調査者の規範的な期待に一義的に違反するような反応が呈示されることはなかったと言える。非優先的な応答をする場合には、遅延や沈黙、フィラー、ヘッジ、説明語句などを含めて長くなったり、複雑な組み立てになったりすることがほとんどであるが (Heritage, 1988)、②の発話に見られるように、調査協力者はたとえ実施に対して前向きではない状況であっても調査者との親和的な関係構築のための行為 (affiliative action) を伴っている。また、③のような確認要求は相手の質問意図が理解できないことを呈示すると同時に、その理解に努めようとする試みでもあり、その点においても課題を一般的に望まれる方法で遂行しようとしている態度を調査協力者は示している。

以上の表現は、いずれの事例でも調査協力者は、調査者及び、この場面の性格に対し同等の規範を指標していると言えるのだが、即座に受諾が示された事例と、困難さが示された事例において、彼らはどのような（メタ）語用論的ストラテジーを用いているのだろうか。以下では、反復に注目し、その点を調査したい。

(2) 発話末に反復が多用されていた群における発話末以外の表現の反復及び、発話末表現とそれ以外の発話の共起

即座に受諾した群における発話末以外の反復構造の分析の結果について、ここでは紙幅の都合上、二事例のみ紹介する。

<事例(c)> 「で-ます」及び「て」系/太字「反復」/二重下線「対照ペア1」/下線「対照ペア2」

1	まず <u>暑い</u> ときは／あまあ <u>寒い</u> とき/ <u>お湯</u> でも <u>構いません</u> ／ということで/ <u>熱い</u> と感じるときは <u>水</u> で <u>構いません</u> ということで、
2	<u>水</u> だとまあ <u>冷たい</u> <u>水</u> だと歯に刺激を与えるので／まあなるべく温度調整をすること、
3	で／コップに注ぎます／で／置きます／で／歯磨き粉が／で／水を止めます、
4	で歯ブラシを出します／歯磨き粉をつけます／ちょっと濡らします／水に浸します、
5	で／磨いて／前の歯から下の歯まで／で／奥歯も磨いて／歯の裏もき磨いて／磨いたら一回／は捨てます、
6	で／もう一回磨きます／で／磨いたら／また吐き出します／で／歯ブラシを洗って／で／戻します／で／うがいします／で／終わります、

この事例では、まず「で-ます」という表現に着目したい。3行目では、「で-ます」系の文が3回連続している。4行目では、「で」に後続して「ます-ます-ます-ます」が連なっている。さらに5行目では「で-で-ます」という形式が確認できる。6行目では、再び「で-ます」系の文が5回連続し「で-ます」という形式を基盤とした説明の型が非常に強固なものとなっている。その他の表現においても「水だと」の繰り返し（2行目）、「磨いて」（5行目）の3回の繰り返しや、その後に「たら」系に形を変えた「磨いたら」や「一回」（5, 6行目）の反復が起こっている。

次に1及び、2行目に目を向けると反復に関わる以下の2つの表現が確認できる。まず反復という側面においては、「構いません」ということで（1行目）が繰り返されている。また（可視化される反復ではないものの概念や機能的にそれに深く関わる）それぞれ前後で対になる対照ペア（小山, 2008）も起きている。「暑い」に続けて次の節では「寒い」、そして「熱い」、さらに、2行目で「冷たい」と、「暑い-寒い-熱い-冷たい」という対照ペアが生起しているが、この中では加えて「お湯」と「水」という対照ペアも確認できる。ペアを成す二つの要素が対照性を示すのは、その二つがペアとなって現れるようなコンテキストにおいてであり、そのペアによって、テキスト化（発話を含むあらゆる）出来事が社会・文化的に認識可能な「テキスト」になるとされ（小山, 2008）、上述した反復とともに、詩的に構造化された、（対話者にとって）より認識可能性の高まるユニットを成すことに貢献している。

<事例 (A) > (抜粋)

「で」及び「て」系/太字「反復」/波下線「相手への指示や相手に事柄をさせるといったモダリティを示す表現」/二重下線「対照ペア」

1	でそれでいっぱいになったらめてもらって／でそれでそのあとコップの歯ブラシの先っぽをつけてもらって、
2	でそしたら／そのまま歯磨きをなにもつけずに／まず一回軽く口の中に自分で好きなように磨いて／痛くないような力で／でそのあとに一回あの、
3	コップの中の水捨てて／しまつて間違つた／あの歯ブラシをコップの中の水でじゃぶじゃぶ洗って／いただいて／でその水は捨てちゃってください
4	でそして／あの：歯ブラ-水を出して／歯ブラシの先端を親指でこするように軽く3, 4回洗って／ください
5	で／そのあとにあの：もう一回 <u>今度歯磨き粉</u> をつけて／あコップの中の水を注いで／で歯磨き粉をつけて
6	でそれで <u>今度</u> はさっきみたいにくっきり丁寧こ／歯磨きをして／ください

上の事例では「で」に「それで/そして/そのあと」等、時系列に述べる接続が後続する連鎖が多用されている。その他にも「て/で」系の音韻的に反復する要素を含む形をとっていることがわかる。またこの事例では動詞のテ形+「くれる」の命令形（ください等）や「もらう」のように、主語が受け手（聞き手が動作主）になるような相手への指示を含む直接依頼形式が継続的に反復されている。具体的には「もらって（1行目）」、「いただいて（3行目）」、「ください（3, 4, 6行目）」がそれに該当し、この調査協力者は一貫してこの場面を「教示・指示」の場面を指標する表現を用いていることが示唆される。

以上に挙げてきた2つの事例を見てみると、反復（換言すれば既に用いられた語彙）以外の表現はさほど多くないことがわかる。そもそも課題自体が「歯磨き」という、ある程度一般に規範的な行為であり、固定化された語彙の多用が想定される場面ではあるが、そのことを差し引いても極めて限定的な種類の語彙使用となっている。4行目で歯磨きの第一段階が終了させたのち、5行目では、2行目からの「歯磨き粉をつけて歯を磨く」行為をもう一度行う（反復する）ことの描写であるが、語彙的にも2行目と5行目の間では「一回」という反復や「つけずに一つけて」という対照ペアが起こっている。既に述べたとおり、反復や対照ペアにより構造化された記号は、そうでない記号よりも強固なユニット化を被る。つまり、このような発話パターンが語られている内容へ聞き手の意識を向ける機能を果たしていると考えられる。

他方実施に対し、冒頭で課題実施に対して、沈黙や「難しい」という語彙を呈示した群においては、反復連鎖構造が希薄であった反面、前置き連鎖（pre-sequence: e. g., Levinson, 1993）が特徴として多く見られた。具体的には「うーん」などを伴った言い訳にといった連鎖が挿入されており、これからの発話が相手にとって語る価値があるかどうか（tellability）についての交渉を行っている事例がほとんどであった。

(3) 発話末の形式に一貫性があまり見られなかった群におけるフィラー及び沈黙

次にフィラー及び沈黙について検討した。フィラーについては、「うーん」「えー」「えっと」「あの一」「まああの」「うー

んと」を対象とした。フィラーについてはそれぞれ異なった機能があるものの本研究では、一般的に言われる（何らかの）問題を検討中であることの明示であると捉え、同等の機能を有すると考えられる沈黙（1.0 秒以上）と合わせて、それらが生じた回数を、依頼に対して即座に受諾を示した群と、躊躇を示した群、それぞれについて確認した。その結果、即座に受諾した群6名でフィラー/沈黙の生起する確率の平均値は、0.06、困難を示した群6名では、0.13であった。事例数が非常に限られているため一般化できないものの、平均的にみると困難を示した群のほうがフィラー及び沈黙の回数が多かった。また、発話末以外の反復は言い直し（repair）に該当する表現がほとんどであった。つまり、困難を示した群では会話の進行という点においては課題をどのように進めるか、もしくは指示されたことについて検討を行う発話や行為が多く、遂行に時間を要する場面が多かったと言える。

5. 結論

本研究では、ASD の症状とされている反復と社会的コミュニケーションの関連性について語用論の観点から分析を行ってきた。その結果、反復と言っても種類は様々なパターンがあり、特定の形式を多く繰り返す参加者がいる一方で、こうしたパターンが少ない参加者まで個人差が大きいことが明らかになった。以上を踏まえ他の語用論的な現象との関連をみたところ、1)課題実施の依頼に対して優先的な応答を見せた群は発話末反復が多く、2)それ以外の箇所でも反復要素が繰り返し共起するものである可能性が示唆された。この結果からは、反復を多用する群は全体の語彙のバラエティはさほど多くない中で、効率的に発話を行う傾向のあることがうかがえた。つまりこの群は、ASD の症状と言われる反復を、課題全体をとおして用いて説明をユニット化（詩的構造化）し、既に用いた表現を再利用することによって自らの思考にあまり負荷をかけず、円滑に発話を進めるエコロジカルな（メタ）語用論的ストラテジーを構築していたことが考察できる。

一方、実施に躊躇を示した群は、「歯磨き」という通常、我々が当たり前に行っている行為について、「やってみせてください」という多義的な解釈（ただ自分が日常で行っている行為をそのままやるのか、調査者に指導するスタンスで行うのか等）を許容する依頼をこの（検査という）コンテクストにおいてどのように理解すればいいのか、つまり、その発話をおかれたコンテクストにおける適切な語用について悩んでいたと推察できる。

成人 ASD 者の日常会話における反復行為についてこれまで詳細な調査は行われてこなかったが、本研究の結果からは、言語の反復が彼らの発話を円滑に進めると同時に、（聞き手にとって）「言われていること」をより明確にし、彼らとの関係性やその発話が行われている場面に対する解釈を統制することに強く貢献する可能性を見出せる可能性が示唆された。しかし今回は検査者側の行為、特にあいづちや調査協力者が言葉に詰まった時の相手の反応について検討することができなかった。また、動画からはジェスチャーとの共起による反復もみられ、これらが記号論的資源(semiotic resource)として ASD 者が社会的コミュニケーションにおける秩序を整合するために用いる語用的ストラテジーへ、どのように貢献しているか調査する必要もあるだろう。この二点については今後、分析を進めたい。

6. 参考文献

- 合崎京子 (2023) . 会話における反復と対話者との相互理解-詩的機能とメタ語用の観点から-. 社会言語科学, 25(2), 25-39.
- American Psychiatric Association. (2022). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed., text rev.). <https://doi.org/10.1176/appi.books.9780890425787>
- Cook, H. M. (1990). An indexical account of the Japanese sentence-final particle 'no'. *Discourse Processes*, 13(4), 401-439.
- Goodwin, C., & Heritage, J. (1990). Conversation analysis. *Annual Review of Anthropology*, 19, 283-307.
- Heritage, J. (1984). *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Heritage, J. (1988). Explanations as accounts: A conversation analytic perspective. In C. Antaki (Ed.), *Analysing everyday explanation: A casebook of methods*, pp. 127-144. CA: Sage.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. Sebeok (Ed.), *Style in Language*, pp. 350-377. MA: MIT Press.
- 小山亘(2008). 記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程. 三元社
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. Basso, & H. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology*, pp. 11-55. Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Sterponi, L. & Shankey, J. (2014). Rethinking echolalia: Repetition as interactional resource in the communication of a child with autism. *Journal of Child Language* 41(2), 275-304.